

八露のや松

薩明 苦有 戲明 遊無



吉川英治全集

第15卷

小林 秀雄

佐佐木茂索

獅子 文六

講談社版

著作權者の了解
により検印廃止

吉川英治全集・15

松のや露八 遊戲菩薩

無明有明

著 者 吉川英治

装幀者 杉本健吉

発行者 野間省一

発行所 株式 講談社

東京都文京区音羽二―二―二
電話東京九四二局二二二(大代表)
振替東京三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大製株式會社
本文用紙 日本パルプ工業株式特瀧

第一刷発行 昭和四十三年七月二十日

定価 六百八十円

© 一九六八年 吉川英治

目次

松のや露八

一

遊戯菩薩

二三

無明有明

三三

松
の
や
露
八

水引竹刀

一

『こんどの冬の陣には、誰が、初伝を取るか』

『夏の陣には、俺が日記方（目録取り）に昇格ってみせる』

などと門人たちは、その日を目あてに精錬していた。暮の十二月二十五日と、中元の七月十日とが入江道場の年二回の表彰日なので、修業の半期半期を、門人たちは、夏の陣、冬の陣、と呼びわけて免許取りの早さばかり競っていた。

道場は、一ツ橋門内の藩邸にあって、門生はもちろん、一ツ橋家（徳川慶喜）の家中の子弟に限られている。皆伝になると、抱え教授入江達三郎から上聞に達し、家格にもよるが、召し出されて、御番人格、御小姓組、御書院詰、などへ出頭することになるので、剣道そのものよりは、同僚を追い抜いて、十俵でも禄米の高を取ろうというのが、ここに群がれる藩の子弟の唯一の目的であるかに見えた。御師範——先生——などと敬称はうけても、経済的に門生の心づけがなければ立ちゆかないし、

家老だの、勘定方だの、上席の子弟を預かってもいるので、抱え教授というものは、およそ如才がなく、そのくせ、処手下の無骨者と極まっているから、生活には弱かった。

だが、その入江達三郎でさえ、時には、眉をひそめることがしばしばである。御三卿の臣といえ、直参も同様だし、やがては、徳川家の第二の柱石でもある青年たちが、あまりに、世才に走り、文化に洗練されすぎて、規模が小さく、線が細く、時勢を小馬鹿にしているふうの賢さが、見え透いて、嫌な気がした。

で——時には、彼らを、床に坐らせ、師範席から高く見おろして、一場の訓諭を垂れることがある。

『諸君』

と、肩の肉をもちあげて、

『——そも、今日を、何と心得めさる。時は今、文久元年でござるぞ。幕府にあつては、内憂外患の秋、当一ツ橋様におかれは、御大老井伊掃部頭殿の刺殺せられた後をうけて、將軍家の御後見となり、幕政御改革に、夜も、安らかに、御寝なされぬと洩れ承わる。やがて来るものは何か。薩南の青年や長土の若者は、何を目ざして来つあるか。おのおのの眼には映らぬか。剣道精神と申すものは、かかる有事の秋にこそ、発揚すべきもの。竹刀打ちの小技や、免許取りに、憂き身を宴す遊芸ではござらぬぞ』

そう、たしなめた終りには、必ずまた、もう一言つけ加えることを、入江師範は忘れなかった。

『——よろしいかの、ちと、先輩の土肥庄次郎や、お客分の渋沢栄一殿（当時篤太夫、また篤太郎とも称す）の勉強を見習うたがよろうぞ』

二

渋沢栄一は、二十二歳だった。武州榛沢村から出てきたばかりで、まだどこか泥くさい田舎出の感じが抜けきれていない。うす菊花石があつて、背の低い方だった。この間まで、下谷練堀小路の海保漁村の塾にいて、神田の千葉の道場で撃剣を修業していたらしいが、何か、一身上のことがあつて、この一ツ橋家の公用人平岡四郎の家へ身をかくしていたのであつた。

藩邸から一歩も出ないので、退屈しのぎに、道場をのぞきに來る。人あたりがいいので、入江達三郎とも、入懇になり、手すじをみると、出来る。

言語が明晰だ。頭脳がいい。

『若い、謙譲で、肚ができとる。渋沢氏を、見習いなさい』
そんなわけで、他流だが、客分として、来ればいつも、道場の上席を与えていた。

その渋沢栄一と並んで、道場の模範生だった土肥庄次郎は、藩の近習番頭取、土肥半蔵の長男だった。いつも、鈍々として、竹刀を持っても、間のぬけたところがある。しかし、真面目で、無口で、体は図ぬけて大きく、固肥りという方で、団栗のような眼をもっている。一見豪傑らしいが、その丸っこい眼が、にやっと笑うと、まるで、子どもだ。

『あいつ、やっと、こんどは、皆伝をとるらしい』

『十四歳から道場へ来ておるのだから十三年目の免許皆伝だ。十三年もやれば、僞僕だって、皆伝になる』

『すると、奴、二十七歳か』

『そうだ』

『二十七歳で、遊蕩を知らんぞ、彼』

『こんど、おびき出すのだな。あいつの、酔ったところを、ぜ』

ひ見ておこう。それには、例の日がいいぞ』

同門の誰彼が、そんなことを、謀しあわせていた。

七月。

暑いさかり、例の夏の陣の表彰日だ。

門下生たちは、高台付きの白扇か、箱入蠟燭か、小菊紙十帖ほどの品物に、半年分の授業料として、金一步(百疋)をつつんで上に「謝儀」と書き、うやうやしく、添えて出すのが、例なのである。

道場の方からは、茶菓、弁当がでる。

正面に、武神、流祖、ふた柱を祀つて、造酒をあげる。式となつて、昇格の免状だの、賞状などが渡され、師範からのお鞭撻の訓話があつて、終わると、夕方は早めに散会という順序であつた。

庄次郎は、皆伝免許の祝いとして、竹刀をもらった。竹刀の腹に、水引がかけてある。それを、右の肩にかつぎ、賞状と皆伝の巻物をつんだ萌黄風呂敷を、左の手にかかえて、にこにこ、藩邸の門を出て來た。

待ちかまえているのが、

『土肥』

と、呼びとめた。

どこの道場にもいる万年門弟という悪摺れのした連中が、

『おめでとう』

『やあ』

庄次郎は、水引のかかっている竹刀と一緒にお辞儀をした。

『欣しかろうな』

『それは……』

『どこへ行っても、もう一流の剣客でおるぞ』

『まだ、まだ』

歩きだした。

三

『近習番頭取の土肥半蔵ときたひには、他人の俸の品行まで頭痛にやむニガ虫屋の堅蔵だ。——その親父のままで、客たれた酒など飲むのは、招かれても、こっちで、ごめん蒙りたい。とにかく、同門の祝杯を、拒むという法はない』

『でも』

『何が、でもだ』

『弟の八十三郎も居ないしするから』

『八十三郎が居ないから、なお、いいじゃないか。兄貴の君とはちがつて、あれは、通人だぞ。なかなか、蔭にまわって、遊つとるらしい』

『そんなことはない。弟は、堅い』

『弟は堅いから、兄貴も、堅くしなければならんという理窟はない。それに、吉原や辰巳へでも、交際えというならとにかく、酒ぐらい飲んで、何がなんだ』

『実は、金がない』

『嘘をつけ。土肥の沓ん坊が、藩では、いちばんの金持ちだといわれておる。吾々の親父も、みんな、貴公の親父から、利息金を借りてゐるんだ。その長男たる貴様が小遣いがないなんて云つたって、誰が、ほんとにするものか。なくても、貴様の顔さえ借れば、どこでも、酒ぐらいは出す』

大男の庄次郎が、水引がけの竹刀をかついで、泣きたそうに、腰を押されて行く態は、奇観だった。

すると、

『もし、土肥さん』

長屋門の窓から、渋沢栄一が、顔を見せて呼びとめた。

刀 竹 引 水

『いや、貴公のその頑丈な体と、皆伝の腕なら、千葉や、九段の斎藤へ行っても、退けはとるまい。めでたい。——しかし土肥、奢らにやいかんぜ』

五、六人が取り巻いて、

『おごれ、おい、奢れよ』

『飲もう』

『祝杯だ』

庄次郎は、あわてて、友達の引っぱる袂をもぎ離れた。

『待つてくれ』

『いいじゃないか』

『俺は、酒は、飲まんぞな』

『飲むのは、吾々がひきうける。どこへ行こう』

一人が、云った。

『吉原』

『吉原はいかん』

と打ち消して、

『しがらき』

同音になって、

『よからう。金六町のしがらきまで交際えよ』

庄次郎は、当惑そうに、ため息をついた。持ちあわせの小遣いもなし、厳格で、質素な家庭に育つたので、酒は、辛いものとか、味を知らなかった。

『今日は、勘弁してくれたまえ』

『今日はって、ほかに、何日、交際ったことがあるか。今日は来い』

『そのうちに、改めて、屋敷へ、お招き申すから』

『馬鹿をいえ』

笑い消して、庄次郎を中に、取り囲んだまま、無理押しに、

『あ、洪沢氏』

『だいぶ、お困りらしいの』

『弱った。とめてくれ』

『とまるものですか、酒飲みが、飲もうと思ひ立った時は、剣法の打ちこみと、同じですよ。それに、古参の方が多勢では——』

『父がやかまし屋で』

『藩邸へ、見えられたとき、私から謝まつてあげます。お持ち合せがないようだが、これに少しばかりありますから、まあ、今日は、交際つてあげなさい。お父上も、同門の交際いまで、いかんとはおっしゃりますまい』

武士のもつ紙入れとはちがつて、うす穢い財布だった。窓から、庄次郎の手に、ほんと、落としてくれたのである。

人斬り健吉

一

しがらき茶屋の奥に、庄次郎を入れて七、八名が、衝立で席を割つて、飲みはじめた。

汐留川が前だった。

店頭は、広土間で、旅婦りをを迎えている人々や、板新道の芸妓と、八丁堀の与力が、公然と出会ひをしているのや、駕かきや、馬の尻が、中仕切の簀戸から透いてみえる。

夕方、のむし暑い風が、せまい銀座横町の馬糞いろの埃と、蠅とを、堀ごしに運んで来て、そら豆の色が青いほか、ちやぶ

台の上は、白っぽくなった。

『洪沢という奴、若い、なるほど、ちよつと話せるな』

『俺は、虫がすかん』

『百姓だ。田舎で、藍玉売りをやっていたそう、武士のくせに、腰が低うて』

『土肥、さっきの財布、見せろ。いくらある。どうせ、天保銭か、台場銭の端ただらうが、飲むに都合がある』

庄次郎が、そのまま、渡すと、

『あつ』

開けて見た四、五人の眼が、息をのんで、

『……だいぶある』

呻いた。

小判で、四、五十両の金を見ると、貧乏藩士の子弟は、ちよつと、酒が醒めてしまった。

『ははあ、読めた』

一人が、急に、気が大きくなったように云った。

『洪沢の奴、何でも、田舎でがらにもない皇学を囃じった、また、それを、流行ものの、勤王運動とやらの実行に移そうとして、八州に嗅ぎつけられ、それで、御当家の、平岡四郎殿へ、縁故をもって縋つて、隠れているのだという風評がある、——これあ、如才なく、吾々に、渡りをつけて来たのだから』

『すると、匿い料か』

『ま、そうと、俺は見ろ』

『じゃ、ありつたけ、飲んでもいいな』

『飲みきれぬものか』

『何、これだけの頭数で、費いきれんどうする、辰巳へゆこう』

それから、はしやぎ出したのである。待合茶屋の豆腐やそら豆ではあきたらない。板新道へ出る、金春をつながって歩く、行く先々で、飲みだした。

飲むまいとするほど、執拗にからまれるので、庄次郎も、赤くなって、せまい湯屋の裏だの脂粉の香のもれる窓先だのを、

『こんな所もあるのかなあ——』

三味線掛けの赤い布だの、鏡台に向いても肌をおし脱いでいる女たちの、ちんとした長火鉢だの、女竹のうえの風鈴だのを、いつのまにか、好ましい気持になって、のぞいて歩いた。

『野暮だ、こんな物、どこかへ、預けてしまえよ』

一人が、酔った紛れに、彼の手から竹刀と風呂敷づつみの免状を奪って、青簾の出窓から、知らぬ家の中へ、抛りこんでしまった。

『あ、それやいかん』

『明日でも、明後日でも、取りに参ればよいさ。——こらつ、その竹刀と包み、預けておくぞ』

すだれ越しに、

『はい』

女の返辞がした。

庄次郎は、狼狽して、

『いけない、いけない』

格子の前に立つと、小さい板に、

(ごしなん萩江さと)

と、書いてあった。

『いいじゃないか。萩江節の師匠だ、お里。——分かっとる。

明日来い、明日——』

先に歩いている多勢が、よろよろ、戻って来て、

『なあに、土肥のかついでいる竹刀が、眼ざわりだから、この萩江お里という稽古所へ、抛りこんで、預けたまてよ』

『それはいい、土肥ッ、何を、まごまごしとるか。——さあ、これからだぞ』

両方から、首ッ玉を——そのまた首ッ玉を、数珠つなぎに抱え合って、

『かんかんのう、きゅうのれす』

大声で、一人が唄いだすと、節をあわせて、

神田アの

急火ですウ

半鐘鳴るベエ

西イ風々

一家たいがい焼けたんべ

めんくが悪くて心配さ

燃えよとは、火イ灰々

ぶら提灯が、避けて、溝へ落ちた。板新道の女が、釵を落として、舌うちをする。町人は、軒下へ貼りついて、

『一ッ橋だ』

と、腫れ物のように、先へ通す。

図にのって、出窓出窓を冷やかしながら、新道を、押し踏けてゆくと、

『気をつけろッ、馬鹿者ッ』

西瓜屋の霞寶が、ところてんと書いた紅提灯を竿の先からぶら下けている路地口の角だった。

肩を突かれたのかも知れない。

西瓜の胚子を踏んづけて、一人が転ぶと、三、四人、一緒に

なって踏めいた。

二

『待てッ!』

さけぶと、

『待っている。なにか、文句があるか』

路地口に、背を向けて、その侍は立っていた。

朱鞘で、白紵の着ながしだった。青顔に、講武所風の鬘先

が、散らばって、少し角ばった苦みのある顔へ、酒のいろを、ぱつと発している。三十前後の男である。

氣をのまれて、二の句を、ぐつと飲んでみると、

『一ツ橋の部屋住ともだな。こういう、次三男坊が多いから、

江戸も腐る。酒もいいが、俺みたいに飲め。一升や二升のんで、まだ、これくらいな性根はある』

端っこにぼんやりしていた一人の横顔を、平手で、ぴしゃりと、撲りつけた。

『あつ』

顔をかかえて、友達の前へ、勢いよく頭を持ってゆくと、二人が、諸仆れに、西瓜屋の縁台へ転がった。

『やったな』

『やった』

『一ツ橋と知ってやったな』

『無論』

『こいつッ!』

一人が、組みつくつと、銭湯屋の溝溜りから、どす黒い水が、剣ねあがったのと、一緒に、草履は、空に、とんでいた。

『およしッ。——およしなさいッ』

西瓜屋の客、親父、往来の者などが、それをきっかけに、酔つてゐる人々を、あわてて抱きとめた。

『人斬り健吉ですぜ、あの侍にかかつて、斬られちゃつまりません。およしなさい』

『健吉、何者だ。主家の名を、辱められて、捨ておけるか』

その健吉の影が、路地を抜けて、もう銀座横町へ出ているのを見送りながら、急に、喚き合つたが、誰の顔にも、酒の氣はふき消されていた。

『おや、土肥が見えん。土肥は、どこへ行ったのか』

虚勢を抜いて、彼らが、氣のついたころには、土肥庄次郎は、その肥えた体を、鈍々と足早にすすめて、健吉とよぶ侍の後を追っていた。

森氏稲荷の裏をとつて、空地をななめに、出雲橋のてまえ、そこで、追いついた。庄次郎は、取りたての免許皆伝、十分な自信があつたし、いちどは実際に、生刀で自分を試してみたい氣もあつたし、彼の性格がまた、傲慢な侍の態度に、ひどく、真ッ正直に、憤りを感じていた。

『待てッ。一ツ橋にも武士がいるぞッ』

後ろから、抜きうちに、氣当 柄音 動作、一瞬に跳びかかつて、斬り上げた。——斬れた、と思つたのであつた。だが、庄次郎自身、

『痛いッ』

と、さけんで、潰れ屋敷の跡らしい雑草と古瓦の上へ、背を、いやというほどぶつけて、投げられていた。

手から、抛り落とした刀を、相手の侍が、拾っていた。そして、

『なるほど、一ツ橋にも、武士がいるな。さ、持ちなおして、もいちど来い。榎原健吉が、すじを、目鑑してやろう』

『……………』

『どうした。それ』

足もとへ、飛んできた刀を拾うと、土肥庄次郎は、後も見ずに、逃げだしてしまつた。逃げる脚すら、がくがくとして、顫えがやまなかつた。

馬の居ない厩 うまや

一

先代の新十郎——つまり土肥庄次郎には祖父にあたる——槍の新十郎といわれた人は、大坪流の槍法の達人で、大酒家の上に豪放不羈な性格だった。そのために、一ツ橋家の指南番までゆきながら、たびたび御前ていをしくじつては、禁酒と謹慎とを、生涯に何度となく繰り返して終わっている。

『祖父を見習うてはいかぬぞ』

それを、子弟の訓戒にしているのが、今の当主半蔵で、『あんな大酒を召しあがらなければ、ずいぶん、御出世もし、家禄も百石にはなつていたろうに』

と、五人の子女の教育費に貧乏している最中は、よく愚痴をこぼしたものである。

三人の女子は、それぞれ嫁いで、今、家に残っているのは、長男の庄次郎と、次男八十三郎の二人きりだった。半蔵の妻は早世して、彼の齢も、早や五十幾歳かのはずである。二十五年來、近習番頭取を勤めて、一度の失策もなく、七十石に足らない糊扶持のうちから、わずかずを割いて、付近の茗荷畑を買って家作を建てたり、藩士の内職の才取をしたり、小金を貸したりして、営々と理財につとめ、とにかく、

『土肥は、小金を持っている』と、家中でも云われるくらいに、律儀一方で、家運を盛りかえした人物なのだ。

屋敷は、小石川武島町だった。

ちょうど、小日向台の裾で、坂と藪ばかりが多いあの辺には、どう眺めても貧乏そうな御筒持組の長屋だの、上水組の屋敷だの、寺だのが、傾斜の所々に、大風に吹き残されたように、ほつ建っている。

土肥家の宅地は、二百坪ぐらいあって、その中ではまあ上の部だった。俗に、琵琶橋という江戸川上水の石橋をわたって、だから坂の中腹に見える大谷石の苔崩れした石段を七、八段のぼると、その上だ。

田舎家みために、前庭の広い南向きに、母屋、書院、小者部屋、納戸、玄關と、こう九間ばかりの古い棟が、曲尺形に建っていて、西の隅に、車井戸と馬のいない厩とがある。

『飼馬料、一年分で、中間の仕着せができよう。馬で、藩邸通いなどは、贅沢な沙汰』

と、先代新十郎の愛馬二頭も、半蔵の代からは、売って、利殖に廻されてしまった。

その、空厩のそばに、柿の樹が、あお白い花を地にこぼしていた。秋になると善寺丸の甘い実が枝をたわめ、庄次郎、八十三郎の兄弟が、齒の生えだした幼少のころから、今もなお、秋になれば、舌つづみを打たせてくれる柿である。

朝、毎朝のことだが。

半蔵は、その柿の樹の下を距離の目標にして、裏的土手へ向かって弓をかまえ、およそ二十五束（一束四本）の矢を放つのが、多年の健康法になっている。

ひゅっ！

矢うなりが、窓の外を通る。

(中たらない！)

(また、外れ！)

そこは、八十三郎の部屋なので、机で素読をしながら、矢が、的へゆかないうちに、窓からよく云い中てて、父を擲擲った。

『うるさいぞよッ』

半蔵は、子に技倆を測られると、やはり面目上、黙っていられないとみえて、

『的を射たがるうちは、まだまだ初心じゃ。弓は、体と精神の一致、無想の鍛錬をもって意とする。禅も同じじゃ』

などと、武芸を説いたりする。

二

今朝は、

(へろ矢！)

(地すべり——)

などと皮肉な声をかけるその予言者が窓を閉めていた。

いないと、さびしい。

五十射ばかりで、止めてしまった。そして矢拾いの中間に、

『重助』

『はい』

『八十三郎、今朝は、どんな容体じゃ。熱は下がらんか』

『ゆうべの蕎麦屋業で、汗が出てから、今朝はだいいぶ、およろしい御容子で』

『そうか。——まだ起きてはいかな。軽はずみせぬよう、わしが留守の間も、たのむ』

『お若いし、お兄上様よりは、強い御気質なので、重助も、お

傳に、手を焼きまする』

『わしが、申し置いたといえ。——ところで、庄次郎は、どうした。今朝はまだ、顔を見せんではないか』

『頭が痛いとおっしゃって、今日は、蚊帳を取るなと——』

『あれも、風邪か』

『では、ないようで』

『八十三郎と違い、あの方は、ぐんと、頑丈な質だ。それに、昨日の容子も、まだわしに聞かせん。起こして来い』

弓掛を外して、縁側で、手刻みの荒い葉を煙管につめていると、

『やあ、お早いものう』

親戚の小林鉄之丞が訪ねて来た。だから坂で、汗をかいたとみえ、少し息を喘って、

『御日課か』

『はは。下手弓をな』

『鳶の子に、鷹は生まれんというが、生まれることもあるの』

『どうして』

『下手弓の子が、きのう、藩の入江道場では、模範と称えられ、年齢としては早くもないが、免許皆伝をうけ、めでとう、卒業したというではないか』

『ほ。そうか』

半蔵の顔は、欣びで、皺だらけになった。

『そうか——と云って、其許は知らんのか』

『まだ、聞かせてもくれぬ』

『そこが、床しい。鈍じゃ、鈍じゃ、と其許はよく、庄次郎を叱りおったが、やはり、見どころがあった。ああいう質が、晩成するものじゃて』

そこへ、重助が、

『旦那様、庄次郎様は、やはり、頭が痛い、うるさいと、おっしゃって出ておいでになりませぬが』

『寝ておるか』

『夜具はたたみ、蚊帳だけ吊って、中に坐っていらっしゃるよううで』

『変な奴じゃな』

だが、そういう性格も、小林鉄之丞に云われてから、急に、わが子の長所みたいに思われ、半蔵は、むしろ、欣しそうな苦笑だった。

叔父の鉄之丞は、

『はあ、読めたよ。それには曰くがある。昨日、道場の帰り道、同門の友達に名譽の祝いをせいと責められて、ちとばかり、飲んで歩いたらしい。——庄次郎とて、もはや年。其許のように、律儀一方、堅い一方で、人間をたたき込むのも、考えものじゃて』

鉄之丞と半蔵とは、これでよく、意見の衝突をやる。鉄之丞は御徒土組同心の御家人で、半町人ほくだけていたから、親類でも、土肥の家へ遊びに行くはいいが、酒一つ出さんから何かやむを得ぬことも起こらなければ出向かないと、常々、冗談にも、公言していたくらいである。

『若い者の慾を、無理に、抑えつけようとすれば、隠れてやりたくなるのが自然じゃ。頭が痛いと申すのは、飲みすぎじゃやう。——よしよし、わしが、連れて来てやる』

三

気さくな叔父に、ひっぱりだされて、庄次郎は、しぶしぶ、蚊帳の中から出てきた。腫れぼったい顔を洗って、父の書院へゆくと、

『どうだ、起きてしまえば、気分が快からう』

『はい』

『今、二人して、相談していたところだが、何しろ、めでた。祖父新十郎の才分が、そちの血に伝わったのじゃ。今日にも、藩邸へ出仕したならば、君侯よりも、御嘉賞のおことが下がらう。追っつけ、其方にも、御役付き仰せつけられるに相違ない。——土肥家の大祝事じゃ、よう、いたした。やかましやの父半蔵が、これほど、欣んでくれたり、賞めちぎってくれたことは、臍の緒きって、初めてだった。』

鉄之丞も、ともども、

『それでな、庄次郎』

『はい』

庄次郎は、いっこうに感激のない顔を、ぼやっと向けていた。

『これやあ一つ、無沙汰の親類どもや、同僚どもを、一夕招んで、祝いをせにやなるまいとわしは思う。なあ、半蔵殿』

『む。……よからう』

そのことが、急に耳へ飛びこんだように、庄次郎は慌てて、

『え、祝宴を。……それは……それはまだ』

『謙遜いたすな。——それとも、物費りと思つて、親父への、気がぬか』

半蔵は、親の一分が立たないように、冗談へ、むきになった。

『ばかを云わっしゃい。わしの平常の儉約は、こういう場合に費うためじゃ。奢らうでか。ぜび、縁者どもをよんで、庄次郎が免許皆伝の披露をしよう。日は、いつにするの』

『はやいがよい』

『では、明日にも』
大乗り気である。

蚊帳坐禪

一

客の頭数やら、手伝いの者やら、二人は即座にとり決めた。その後で、思い出したように、半蔵が、不意に云った。

『忘れていたわい、庄次郎、そちも何としたことだ』

『は？』

『は、じゃない、昨日、入江先生より頂戴して参った免許の目録やら皆伝の巻がある。なぜ、叔父御に、お見せ申さぬ。父にも見せい』

『は』

『どこへ置いた。——重助、重助っ』

『あ、ちょっと、お待ちください。重助には、わかりません』

『では、持ってこい』

『は』

『何を猶予いたしておる』

『ええと？……』

頭をかかえて、考えを絞るように、

『暫時……暫時、お待ちを』

何か、まごまごしながら、立って行く庄次郎の牛みたいな鈍重さを振り向いて、
『いいところがある』

鉄之丞が、惚れこむと、

『ははは、左様かな』

『晩成ものじゃ、大器という人物は、あでなくてはい』

『いったいに、幼少から、八十三郎めの病弱で気の強いのは反対に、喜怒哀楽をあらわさぬ奴での。変わっておったよ』

野呂間な姿までが、にわかによく見えてきて、半蔵は、自慢らしく云った。

その庄次郎の顔が、やがて、ぬうと襟を開けて、

『父上。——ありません』

『皆伝の目録や巻がない？』

『ハ……。たしかに、小風呂敷に包んで、机の上に、おいたはずですが』

『では、あろうが』

『それが、いくら見ても——』

『どうした理じゃ』

猫が引いて行ったのかも知れません』

二

『ははは』

笑い転けたが——すぐ真面目に心配しだして、

『よく考えろ。忘れたのではないか、どこぞへ』

『さあ？』

庄次郎は、襖の外へ、顔をかくして、尻だけを見せていた。

『忘れたのであろうが』

『……はあ』

『はあ、じゃない、大事な品、いかがでした』

『やっぱり、忘れたのだ』

『どこへ』

『じつは……昨日……』

云い渡ると、鉄之丞が、救つてやるように、

『祝いに、飲み歩いたというではないか。その際、友達の手へ、預けてもしたか』

『あ、そうだ。左様でございました。道場から帰りに、渋沢栄一殿が、落とすといかぬと注意してくれましたので……』

『では、今日にも、頂戴して参れ』

『はい』

間もなく、半蔵は出仕の時刻であり、鉄之丞も、親類へ廻るといつて、二人とも出ていった。

重助が、その後で、

『若旦那、味噌汁が冷めました』

『飯はいらん』

土肥庄次郎は、また、自分の部屋に吊りッ放しの蚊帳の中へ入ってしまった。

腕を拱む。

いかにも、腐ったという恰好である。

『あんなって、はずはない。あんなってはずは……』

ゆうべの失敗を思うと、涙が出そうだった。半生の信念に、

大きな動揺をうけての溜息だった。叔父の前では、我慢して

いたが、じつはまだ、ゆうべ、したたかに投げつけられたときの

腰の挫骨が、ずきずきと火で、ひどく痛い。

不思議でならないのだ。どうして、あんなぶざまに投げられ

たろう。十三年間の道場通いを考えると、口惜しいよりは、情

ない。しかも昨日は、師から免許皆伝の目録を授けられたばかりの

の帰りだ。

『何をして来たのか、十年の余も——』

考えざるを得なかった。それだけの歳月を、寒稽古の、土用

試合のと、竹刀でばかばか撲られた上、一ツ橋から小石川の果てまで、往復の足数だけでも、何千里歩いたことになるか、容易な根気で貰った免許皆伝ではない。

『ふしぎだ。……いくら相手が、榊原でも』

彼は、不合理と取っ組んで、じつと、半日坐りこんでいた。

すると、

『兄上、どうなさいました』

弟の八十三郎が、起きだして来て、彼の蚊帳坐禪をのぞきこんだ。

三

『どうもせぬ』

『お暑いでしょう、蚊帳を吊ったまま——』

『やぶ蚊めが、うるさいのだ』

『昨日は、風邪で、道場へ参れず、残念でした。しかし、おめでとう存じます。先刻、叔父御の声を洩れ聞きますと、明晩

は、御披露のお祝いとやら、拙者も、病床を上げてしまいまし

た』

すべてが、庄次郎には、皮肉に聞かえた。

『おい、弟。——おまえの部屋に、新刷の武鑑があるか』

『誰だ、お調べなさるので』

『榊原』

『榊原家は、何軒もございしますが』

『健吉と云った。榊原健吉、御家人か、藩士か、何役だ』

『あの人なら、武鑑を見るまでもございませぬ。人斬り健吉で

通るくらい』

『そんな有名な奴か』

『念のため、見ましようか』